

【報告書】

2023 年度トランスコスモス財団

学術・科学技術等の分野への助成事業

観光産業およびモノづくり産業の生存・成長戦略に関する実証研究

村山貴俊（東北学院大学経営学部教授）（研究代表者）

松岡孝介（東北学院大学経営学部教授）

秋池 篤（東北学院大学経営部准教授）

2024 年 3 月

I 本研究の目的、背景、成果予測

以下のような目的、背景ならびに予測成果にそって本研究は進められた。

(研究の目的)

激化する競争環境の中で、資源や能力の不足する組織がいかに存続するかという視点は、中小企業論や地域観光地経営において重要なテーマの1つになっている。将来の経営環境がますます不確実になり、グローバル競争が激化していく中で、中小企業や地域観光地は、既存の強みや弱みを踏まえつつ、より有利な競争上のポジションの獲得とそれを支える能力の構築を進める必要がある(村山, 2023; Murayama et al., 2022)。以上の問題意識に基づき、本研究では、モノづくり中小企業や地域観光地を分析対象とし、激しい環境変化と競争の中で生き残るための独自のポジション形成ならびに能力構築に関する実証研究を進める。

【参考文献】

村山貴俊(2023)『中京経済圏モノづくり中小企業の生き残り戦略—自動車部品・金型メーカーに学ぶ』東京:中央経済社。

Murayama T, Brown G, Hallak R, Matsuoka K. (2022). Tourism Destination Competitiveness: Analysis and Strategy of the Miyagi Zaō Mountains Area, Japan. *Sustainability*. 14(15):9124. <https://doi.org/10.3390/su14159124>

(背景および独自の特徴)

競争戦略論を提唱した M.E. Porter (1998) は、戦略とは有利なポジションあるいは競争条件を有利に変更できるポジションへと自社を導くことにありと主張した。また、リソース・ベースド・ビュー (RBV) を提唱した B. Wernerfelt (1984) は、それらポジションを支える企業の資源や能力の必要性を強調した。さらに RBV では、独自資源は有利なポジションでの競争に利用されなければならないとも指摘されていた。すなわち、企業が競争を有利に進めて生き残るためには、有利なポジションと資源との相互補完性が不可欠になる。

さらに、ダイナミック・ケイパビリティという概念を提唱した D.J. Teece (2009) は、有利なポジションと資源の補完性は一時的なものになる可能性が高いため、環境変化の中で企業がしぶとく生き残るためには企業内外に張り巡らせたネットワークを駆使して情報を収集し、資源を動的に再編する能力が必要になるとした。本研究では、これら経営戦略論の理論や分析枠組みに依拠して、地域観光地やモノづくり中小企業の生き残り戦略としてのポジション構築ならびに能力構築を分析することになる。

【参考文献】

Porter, M. E. (1998). *On competition*. Boston, MA: US, Harvard Business Press.

Wernerfelt, B. (1984). A resource-based view of the firm. *Strategic management journal*. 5(2), 171-180.

Teece, D.J. (2009). *Dynamic Capabilities and Strategic Management: Organizing for Innovation and Growth*. Oxford: UK, Oxford University Press.

(具体的な調査方法と内容)

以下の2つの方法で調査研究を進める。

①地域観光地に関する調査

アンケート調査を中心に観光客や地域住民から観光地競争力の評価に関するデータを収集する。定量データは統計解析を施し、観光地の強みや弱みを特定したり、観光客と住民の評価の差異を析出したりする。そのうえで、それらのデータや分析結果が、地域観光地の観光戦略を検討する際の基礎データとしても活用し得ることを示す。また、ヒアリング調査や記述式回答などの定性的情報も併用し、顧客セグメントごとの観光地イメージならびに競合する観光地に対する当該観光地のポジショニングなども明らかにする。

加えて、観光地競争力を拡大するためのメガイベント活用の可能性などについても検討する。観光地競争力の調査と研究に関しては、南オーストラリア大学の研究者を日本に招聘し共同研究会を実施する予定である。こうした研究会を通じて、これまでの研究成果を英語で発表すると共に、地域観光地への知識の還元を図る。

②モノづくり中小企業に関する調査

モノづくり中小企業を訪問し、経営者へのインタビューおよび工場の現場を観察することで情報収集を進める。それら情報を基にケースを作成し、各企業の競争戦略の実践ならびに課題を明らかにする。また各社のケースに共通した部分を析出することで、モノづくり中小企業の生存・成長に資する戦略的かつ具体的な提言を示す。

(成果予測)

地域観光地の調査については、南オーストラリア大学の研究者と連携して英語の論文として成果を発信する予定である。また、分析結果を地域観光地のステークホルダーと共有し、地域観光戦略の立案にも役立てる。

モノづくり中小企業の調査はケース資料として大学紀要などに公刊し、大学生の経営学の教育教材ならびに中小企業の後継者などの育成教材としても活用していく予定である。

いずれも学術的な成果のみを追求するのではなく、それらの成果を地域・教育・実業界へと還元することで、貴財団による助成を地域の持続可能な発展ならびに地域の人材育成へと繋げていきたいと考えている。

II 研究成果

(アンケート調査の実施)

本年度は、観光地競争力の重要な要素の1つであるメガイベントに関する追加アンケート調査を実施した。現在、大阪万博の負の側面に関する議論が盛んにおこなわれており、今後、我が国や各地域が、観光地競争力の構築手段としてメガイベントやイベントを活用すべ

きか否かを検討することは重要な課題となる。アンケート調査とその分析結果の詳細については、今後、論文として発表する予定である。

(国際シンポジウム、共同調査・研究会の開催)

本研究では、以下の要領にて、2024年2月13日・14日に、宮城県の蔵王町および石巻市で学術研究および地域人材の育成を目的とした国際シンポジウム *Building Sustainable and Reliable Tourism Destinations: Lessons from Foreign Researchers* を開催し、研究成果の地域への還元をおこなった。当初計画では、共同研究会のみの開催を考えていたが、地域人材の育成に関する産学官連携のニーズがあることを知り、共同研究会の内容を国際シンポジウムとして地域の方々へと公開することにした。

① 2月13日

「観光学を学ぶ国際シンポジウム in 蔵王町

持続可能で信頼される観光地の構築に向けて—海外研究者に学ぶ—

開催の主旨：

東日本大震災そして新型コロナウイルスという厳しい状況を経験してきた東北地方の観光地。人口減・高齢化という構造的問題を抱える東北の各地において、交流人口を拡大するための観光産業への期待が高まっている。

国内外の観光地間の苛烈な競争ならびに将来起こりうる災害や経済変動に対峙しつつ、持続可能な観光地をどのように作り上げていけば良いのか。また、地域の住民や産業界など多様なステークホルダーから信頼される観光地とは何か。観光学の国際的研究の第一線で活躍する著名な海外研究者を講師に招き、持続可能で信頼される東北地方の観光地の形成に向けて助言や提言をいただく。

開催日時：

2024年2月13日(火) 12:30~15:30 蔵王町ふるさと文化会館(ございんホール)

蔵王町町役場農林観光課・東北学院大学経営学部観光研究チーム共催

プログラム：

◆第1報告(45分+10分質疑)

グラハム・ブラウン(Graham Brown) 名誉教授

(南オーストラリア大学)

「持続可能な経済に資する観光とその役割を理解する」(対面講演)

(日本語版のレジュメを準備します。同時通訳は行いません)

◆第2報告(45分+10分質疑)

ロブ・ハラック(Rob Hallak) 准教授(南オーストラリア大学)

「観光産業における起業家精神」(ZOOM講演)

(日本語版のレジュメを準備します。同時通訳は行いません)

- ◆第3 報告（15 分）（時間がない場合は、本報告を省略することもあります）

東北学院大学経営学部観光研究チーム（村山貴俊・松岡孝介・秋池篤）

「宮城県の地域観光地研究の成果報告」

- ◆意見交換 グラハム・ブラウン名誉教授と参加者との討議および質疑（30 分）

（討議と質疑は、東北学院大学の教員が通訳を行います）

②2 月 14 日

「観光学を学ぶ国際シンポジウム in 石巻市

持続可能で信頼される観光地の構築に向けて—海外研究者に学ぶ—」

開催日時：

2024 年 2 月 14 日（水）13：00～16：00

石巻市かわまち交流センター（かわべい）

（一社）石巻圏観光推進機構・東北学院大学経営学部観光研究チーム共催

プログラム：

- ◆第1 報告（45 分+10 分質疑）

グラハム・ブラウン（Graham Brown）名誉教授

（南オーストラリア大学）

「持続可能な経済に資する観光とその役割を理解する」（対面講演）

（日本語版のレジュメを準備します。同時通訳は行いません）

- ◆第2 報告（45 分+10 分質疑）

ロブ・ハラック（Rob Hallak）准教授（南オーストラリア大学）

「観光産業における起業家精神」（ZOOM 講演）

（日本語版のレジュメを準備します。同時通訳は行いません）

- ◆第3 報告（15 分）（時間がない場合は、本報告を省略することもあります）

東北学院大学経営学部観光研究チーム（村山貴俊・松岡孝介・秋池篤）

「宮城県の地域観光地研究の成果報告:宮城蔵王競争力調査および震災時の女将の起業家精神の発揮」

- ◆意見交換 グラハム・ブラウン名誉教授と参加者との討議および質疑（30 分）

（討議と質疑は、東北学院大学の教員が通訳を行います）

また、シンポジウムと研究会の前後に、グラハム・ブラウン教授と共に宮城県と山形県の観光地でフィールド調査を実施し、観光地競争力を分析する際の分析視角や評価基準に関して、国際的な研究動向を踏まえた助言をいただいた。また、それらフィールド調査に基づき、同教授からは、今後の共同研究の案とその際の分析視角をご教示いただいた。

（事前の広報活動）

- ①東北学院大学 HP【経営学部】持続可能な観光地を考える国際シンポジウム開催のお知らせ

せ(2/13、2/14) (<https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/240209-1.html>) 2024 年 2 月 9 日公開

②石巻圏観光推進機構 HP 海街さんぽ「観光学を学ぶ国際シンポジウム in 石巻市を開催します」(https://www.umimachi-sanpo.com/news/symposium_kokusaikanko_2024/) 2024 年 1 月 29 日公開

(新聞各社などによる報道)

なお、2 月 14 日に石巻市で開催したシンポジウムの様子は、新聞各紙ならびに大学 HP で以下のような記事として報じられた。

①「持続可能な観光地、提言 14 日、石巻で国際シンポ 交流人口の拡大考える」『河北新報』2024 年 2 月 9 日付 (<https://kahoku.news/articles/20240209khn000011.html>)

「『持続可能で信頼される観光地の構築に向けて——海外研究者からの提言』と題し、石巻圏域の交流人口拡大について考える。講師は観光学の国際的研究の第一人者、ロブ・ハラック准教授、グラハム・ブラウン名誉教授（共に南オーストラリア大）。講演やブラウン名誉教授と参加者との討議、質疑応答などを行う。シンポジウムは英語で行うため、参加者には日本語版のレジュメが渡される。討議・質疑応答は同時通訳する。」(上掲記事より内容の一部を引用)

②「石巻で観光を学ぶ国際シンポ 豪州大学教授らが提言」『石巻かほく』(2024 年 2 月 21 日付) 写真入りの記事として大きく取り上げられた。

③「【経営学部】持続可能な観光地を考える国際シンポジウム 開催報告」(<https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/240219-3.html>) 2024 年 2 月 20 日公開

III 自己評価

(効果)

蔵王町と石巻市で実施したシンポジウム・研究会では、地方自治体関係者、地域産業関係者および地域住民の方々に対して、国際的に活躍する研究者による報告ならびに質疑応答に触れられる貴重な機会を提供できたと考えられる。こうした取組は、学びを通じて人を育てるというトランスコスモス財団の理念とも軌を一にするものといえよう。加えて今回は、海外から招聘した研究者と東北学院大学の研究者とが蔵王町と石巻市に赴き、現地で研究会とシンポジウムを開催するという新たな試みに挑戦した。会場や設備の確保や事務上の手続きなどは非常に大変であったが、その準備過程で現地に何度も足を運び、観光地の現場担当者が抱える課題や悩みを直に窺い知ることができた。また、新型コロナウイルス感染症の影響で希薄になった地域との関係を再構築する良い機会と場にもなった。地域課題が山積する東北地方を基盤とする大学の研究者として、長期的視点から地域課題に向き合い、それらの課題解決に貢献していくことの必要性を再認識することもできた。

シンポジウム・研究会は、全て英語で実施し、それが参加者のさらなる学びへの刺激にな

ったとも考えられる。地方自治体、観光経営組織の関係者、そして地域住民の方々からは、今後も、産学官連携を通じて地域の観光業の発展と観光関連人材の教育を支援していただきたいという言葉と評価をいただいた。今後も、シンポジウムや研究会などを通じて、地域人材の育成に貢献していきたい。大学自体が経営合理化のために調査予算の削減を急激に進めているため研究者が地域に赴くことは年々難しくなっているが、貴財団からの助成があることで地域貢献を継続していくことができる。

さらに、グラハム・ブラウン教授との宮城県と山形県の観光地での共同フィールド調査を踏まえ、世界で活躍する一流の研究者の視点から日本の観光そして観光研究に求められる視点を学ぶことができた。今回の共同調査の中で、ブラウン教授からは、3つの魅力的な共同研究の案が示され、今後、日本の観光地や観光産業を対象にした国際共同研究の進展が期待できる。

(残された課題)

一方、観光メガイベントに関するアンケート調査も実施したが、それらを論文として海外ジャーナルに発表するまでには至らなかった。1年という期間で、論文投稿を完了するのは難しかった。今後も論文の執筆と投稿を継続することで、2024 年度中に公刊したいと考えている。この点も、グラハム・ブラウン教授と論文公刊までの計画を入念に打ち合わせすることができた。

IV 収支報告

収支報告については、東北学院大学研究支援部研究支援課から提供されたファイルを別添する。

(以上)